



母校

元小

学 校 だ よ り
令和 3 年 7 月
川口市立元郷小学校
児童数：531名

「学校を愛する」「地域を愛する」ということ

校長 吉 田 栄

眩しい陽射しを遮る木立ちの陰に、ほっと一息の今日この頃、晴れ渡る青空には夏の訪れを感じます。暑さはさらに厳しく、本格的な夏の到来です。7月「文月」。学校では1学期のまとめの時期を迎えました。

本校では前年度から、学期ごとに、校内や地域の美化に関心をもたせ、美化活動をとおして住みよい環境をつくる態度を育て、実践できるようにすることをねらいとした「愛校活動」に取り組んでいます。もともと「愛校」とは、自分の出身校や在籍校を愛することを表し、そうした心は「愛校心」と呼ばれます。

自分の在籍する学校や、自分の母校を愛することは、珍しいことでも、恥ずかしいことでもありません。愛校心は、同世代の仲間とともに毎日を過ごす中で、自然と生じる学び舎への愛着のような感情であると考えます。児童は1日の大半を学校で過ごしています。年間の授業日数がおよそ200日ですから、6年間でおよそ1200日通う学校です。この期間は、6歳から12歳までの幼少期から青年期にかけての大きな成長が見込める期間です。こと同世代の仲間たちと集団生活を送る中、児童の社会性の育成には大きく期待できます。成長とともに慣れ親しんだ学校に対し、自分の学び舎を愛する気持ちを形に表すよい機会として、さらには勤労の尊さや生産の喜びを体得するとともにボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験を充実させるため、美化活動としての「愛校活動」を設定しました。

学校を愛する気持ちをもって、自分たちの学習環境や生活環境を自分たちの手で整えることは、元郷小の一員として所属感や帰属感を高める上でとても大切なことだと考えます。さらに広げて考えれば、児童は学校の一員であると同時に、地域の一員でもあります。愛校心から美化活動ができるのであれば、反対に、いつも自分を見守り、はぐくんでくれる地域に対し、地域の美化活動を行うことで、児童一人一人に郷土愛をはぐくむこともできるのではないかと考えました。愛校心から学校の美化活動へ、そして地域の美化活動から郷土愛をはぐくんでいく…。愛校活動は地域へと広がります。愛校活動に参加する児童は、それぞれの学年ごとに分担された場所の美化活動に取り組みます。1年生から3年生までの低学年の児童は、校内や校庭、学校周りの美化活動を行い、4年生から6年生までの高学年の児童は、地域の公園の美化活動を行います。

アメリカのメジャーリーグで、投手と打者の二刀流で活躍している野球選手の 大谷翔平 氏は、試合中、グラウンドにごみが落ちてしていると意識して拾うようにしています。「きれいなグラウンドで試合をしたい」「ごみが落ちてしていると試合の邪魔になる」…。様々な理由が思い浮かびます。大谷選手は、自分よりずっと年上の選手が率先してごみを拾っている姿に感動したそうです。当然、そうした大谷選手の行動の根底には、野球に対する強い愛情があることは言うまでもありません。大谷選手は、グラウンドのごみ拾いのことを聞かれると「人が捨てた幸運を拾っている」と答えています。

「ごみを捨てるごとに一緒に捨てている大切な何か」「ごみを拾うごとに一緒に拾っている大切な何か」…。よく言われている言葉です。「大切な何か」とは、いったい何でしょう。大谷選手の言う「幸運」。それは、自分たちの場所を大切に思う心そのものではないかと思えます。まさに「大切な何か」とは、学校であれば「愛校心」、地域であれば「郷土愛」と言うことができるのではないのでしょうか。

元郷小が、地域とともに歩む学校づくり、地域に根差した学校づくりを目指す以上、児童一人一人がこの元郷の郷土に誇りをもてるようにすることが大切であると考えます。これから自分自身の手でこの郷土を守ることができるよう、そして郷土を愛する心をその内面に着実にはぐくんでいくことのできるよう、今後とも力を尽くしてまいります。